

2022（令和4）年度 競技規則変更についての質疑に対する回答（第一次）



2022（令和4）年5月25日

（公財）日本ハンドボール協会 競技・審判本部

1. 「ボールがゴールキーパー（以下、GK）の頭部へ直撃した際の罰則の適用」について

<競技規則 8：8d、13：1a、8：7d、8：9d>

Q1. 国内大会では7月1日より実施と聞きました。全国大会予選となる都道府県大会は、施行前に予選大会を実施することになるが、全国大会に向けて、7月1日より以前から適用してもよいのか。

A. 今回の競技規則の新設および変更となった内容のうち、「スローオフエリア」「パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数の変更」に関し、各都道府県・各ブロックにおける予選大会の開催時期等も考慮し、その運用の有無について、各連盟に一任しております。本Q&Aの最後に、各連盟からの回答を集約した「<別表> 新競技規則に係る各連盟における運用」を掲載しておりますので、そちらも参考にいただければと思います。

Q2. 直撃とは「かする」場合も含むのか。

例えば … ①おでこの上部をかすりながら、そのままゴールイン

②左目をかすったが、ボールの軌道は変わらずゴールイン

A. 「頭部への直撃」は、GKの頭部に当たった後に「ボールの軌道が明らかに変わる」ことを示し、ご質問の状況は、直撃にはあたりません。「直接GKの頭部に当たる」ことの判断基準は、その試合を担当するレフェリーの事実観察や判断に基づくものとなります（競技規則17：11）。



Q3. ノーマークで打ったシュートが、ボールの方向へと動いていないGKの頭部に当たり、ボールの軌道が変わりゴールに入った。この場合、罰則の適用となるか。

A. ご質問の状況ではGKの頭部への直撃と判断されますので、ゴールは認められず、シューターに対して罰則を適用します（競技規則8：8d）。

Q4. DFとの接触があったものの、明らかな得点チャンスを得て、ボールと体をコントロールできている状態で打ったシュートがGKの頭部に当たった場合、罰則の適用となるのか。

A. ボールと体をコントロールできている状態でシュートを打ったのであれば、シューターに対して、罰則を適用します。

Q 5. シュートを止めるために動いた GK の頭部に直撃した場合でも、罰則の対象となるか。

- A.** GK が「ボールの方向へと頭部を動かしたことで」、「結果的に」ボールが頭部に当たったのであれば、**罰則は適用されません**（競技規則 8：8d 【注】）。

Q 6. GK のテクニックとして顔横のシュートを、おでこで取りにいった当たった場合、「直撃」と判断するのか。

- A.** GK が「ボールの方向へと頭部を動かしている場合」、**罰則は適用されません**（競技規則 8：8d 【注】）。Q 5 の回答同様、**GK 自身がシュートを止めに行く過程で、結果的に**ボールが頭部に当たった場合、本競技規則の適用はありません。

Q 7. ループシュートを狙って頭部に当たった場合にも適用するのか。

- A.** ループシュートが頭部に当たったとしても「直撃」にはあらず、8：8d の適用はありません。

本競技規則の新設の背景には、**攻撃回数が増えていく中で**、GK を守るため、シューターに対して**シュートコースへの注意喚起を促す**目的があります。したがって、保護される GK にも**その振る舞い方が**求められることとなります。

Q 8. 7mスローの実施において、ボールの方向へと動いていない GK の頭部にボールをぶつけた場合の「失格」は継続か。

- A.** 7mスローの実施に際して、**ボールの方向へと頭部を動かしていない GK の頭部に**ボールをぶつけた場合は、引き続き**「失格」の判定**となります（競技規則 8：9d）。

Q 9. 頭部に直撃したにもかかわらず、GK 自らが速攻に転じるためにボールを出そうとしている場合でも、時間を止めてシューターを退場にすべきか。

- A.** 8：8d を適用する状況で GK の頭部に直撃したのであれば、**競技を中断し、GK の安全を確認**した後、シューターに**罰則を適用**します。

Q10. ラインクロスや着地、オーバーステップ等の違反があった後、放ったシュートが GK の頭部に直撃した場合、罰則は適用されるのか。

- A.** 相手 GK と 1 対 1 の状況で打たれたシュートであれば、**罰則の適用**となります。
そのためレフェリーは
1. 直ちに競技を中断し、GK の救護を優先（ジェスチャー15、16）
（当たったのが防御側プレーヤーであれば防御側プレーヤーへの救護となります）
 2. 両レフェリーで**協議**
を行い、どの競技規則（8：8b、8：8d、8：9a、8：9c）に該当するかの判断をします。

Q11. GK がレフェリーの判定を欺くために演技を行い、レフェリーが 8：7d（スポーツマンシップに反する行為により段階的罰則を適用）を適用した場合、その再開方法はどちらがいいのか。ボールが当たったのだから、「負傷した GK」に対する運用（ガイドライン 6：8）を行うのか。

- A.** 欺く行為が**明らか**であるならば、「負傷した GK（ガイドライン 競技規則 6:8）」の運用は**不要**であり、欺く行為を行った GK に対し競技規則 8：7d を適用の上、**相手チームのフリースローからの再開**となります。

もしも、GK の体のどの部分に当たったのか**すぐに判断がつかない**場合、まずは負傷した GK に対する運用（ガイドライン 競技規則 6:8）を行い、両レフェリーで**協議**となります。

その結果、

- ・ボールは体を直撃したが、「頭部への直撃ではない」と判断

GK は**頭部にボールが当たっていない**ため、当該 GK に対し、コート上で治療行為を行ったプレーヤーに対する運用（自チームの 3 回の攻撃間は出場できない）を行います。
またプレーの再開方法は、競技規則 ガイドライン 6：8 に準じた方法での再開となります。

- ・頭部への直撃と見せかけた行為であると判断

GK に対し競技規則 8：7d を適用の上、相手チームのフリースローからの再開となります。かつ、当該 GK に対し、コート上で治療行為を行ったプレーヤーに対する運用（自チームの 3 回の攻撃間は出場できない）を行います。

また、上記 3 つの状況のうち、段階的罰則が適用が**結果的に** 2 分間退場となる場合、相手チームのフリースローからの再開となり、当該 GK に対して、負傷した際の運用（自チームの 3 回の攻撃間は出場できない）ではなく、競技規則解釈 8a により、「**退場時間の満了によって**コートに戻る事ができる」の運用となります。

Q12. より正確な判定が求められるかと思いますが、良い位置取りなどあれば教えてほしい。

- A.** 国際ハンドボール連盟では、「これからのレフェリングスタイル」としてこれまで同様、領域分担の考え方を基本に据えながらも、「正しい判定を両レフェリーで下していく」考え方も提示しました。つまり、「個々のレフェリーの領域分担に基づいた判定」に加え、新たに「両レフェリーで連携・協力しながら正しい判定を下していく」考え方を推奨しており、日本協会審判本部としても、同様に取り入れていく方向です。
- シュートがGKのどこに当たったかについて、ゴールレフェリーの位置によっては（例えば、GKの背中側に位置を取った場合）、正しく判定することができません。その場合、コートレフェリーが、離れた位置からGKの防御動作とシュートの軌道について観察することもできます。
- もしも、ゴールレフェリーがGKの頭部にボールが当たったことに気付かない場合、
- ・コートレフェリーから通信機器を活用して、ペアに伝え、競技の中断を促す
 - ・通信機器がない場合、コートレフェリー自ら、競技を中断する（中断することも可能）
- のいずれかの方法で、ペアと連携し判断することになります。
- この連携を行うためには、ゴールレフェリーに加えコートレフェリーも「シュートの軌道から目を離してはならない」ことが、これまで以上に大切となります。
- 以上のことからシュートの軌道の観察は、ゴールレフェリーの責任領域であることを原則とした上で、ゴールレフェリーとして、「正確に見極めることができる位置取りを工夫しつつ、最終局面を立ち止まって観察する」ことに加え、正しい判定を下していくために、「コートレフェリーからのサポートを受け、ペアで観察・判断」していただければと思います。

2. 「ボールサイズ（外周）」について

<競技規則 3：2、表1>

Q13. 松やにを使用しなくてもプレーできるボールを用いる場合、レフェリーやT0として気を付けることはあるか。

- A.** 主催する連盟（特に小学生委員会、中学生委員会、中体連）によって、新規程球の使用に係る松やにの使用の可否や両面テープの使用の可否が異なります。各種大会の大会要項をご確認ください。
- また、競技前、競技中において、以下の場所を観察することも、他の違反やトラブルなどを予防することにもつながります。
- ・松やにが使用できない → 松やにをためる可能性がある場所（例えば、手や指の間、靴）
 - ・松やにが使用できる → プレーヤーが松やにをどこにつけているか
- もしも競技中に、使用を確認したのであれば、使用を中止する（あるいは取り外す）よう当該プレーヤーとチーム責任者に促し、それでも繰り返した場合は、段階的罰則を適用します（競技規則4：9、ガイドライン付録）。

3. 「スローオフエリアの新設」について

<競技規則 1:9、図 1b および 1c、10:5、13:1a、第 15 条 / 解釈 5>

Q14. ジャパンオープンや国体ではスローオフエリアは使用しないということだが、インターハイも同様と考えて良いか。

A. 運用の有無について、各連盟に一任しております。

本Q & Aの最後に、各連盟からの回答を集約した「<別表> 新競技規則に係る各連盟における運用」を掲載しておりますので、そちらも参考にいただければと思います。

Q15. 競技規則1の1 コートの長さは小学生の場合は36mが標準

→ 36mとした場合、スローオフエリアの円の直径は4mでよいのか。

A. Jクイックハンドボールでは、得点後の競技の再開は、GK スローを実施することで再開となります。そのため小学生のカテゴリーにおいて、現段階でのスローオフエリアの設置予定はありません。

Q16. スローオフエリアは、壁のイメージか。

A. ゴールエリアあるいは、ゴールエリアに適用される競技規則をイメージいただくと整理しやすいかと思います。

写真のようにスローを行うチームの相手チームは、スローオフが完了するまで、その空間（写真黄色枠）も含め、スローオフエリアの外側にいなければいけません。



Q17. 相手チームのプレーヤーは、3mの確保をしなくては行けないか。

A. ゴールエリアをイメージいただくと、整理しやすいかと思います。ゴールエリア同様、スローを行うチームの相手チームは、スローオフエリアのすぐ外にいることが許されます。

Q18. スローオフの実施方法で「片足がエリアの中にある」状態とは、足が少しでも入っていればOKか、それとも片足が完全に入っていないと成立しないのか。

- A. 少なくともどちらか一方の足がスローオフエリアの中にあり、かつ、ボールもスローオフエリアの中にある状況であれば、レフェリーは、スローオフの笛を吹くことができます。



Q19. スローを行うプレイヤーの位置について、スローオフエリア内であれば、センターラインの位置を越えて相手チーム側のコートに位置を取ることが可能か。

- A. スローオフエリアの中であれば、右写真のように、相手チームコート側のスローオフエリア内に位置を取ることが可能です。



Q20. スローオフが完了したとみなされるまで、スローオフエリアラインを踏み越えてはならないとあるが、これは片脚か。両脚か。

- A. 「身体のどこか一部」がスローオフエリアラインを越えた場合、となりますので、片足が出た時点で違反となります。

Q21. スローを行なう味方のプレイヤーはスローオフエリア内であれば、センターラインの延長線上より前に位置していても良いということか？

- A. スローを行う味方のプレイヤーも、スローを行うプレイヤー同様、相手チームコート側のスローオフエリア内に位置を取ることが可能です（競技規則 10：5g）。また、スローオフエリアの中であれば、スローを行うプレイヤーよりも前方で、味方のプレイヤーがボールをもらうために位置を取っていることも可能です。



Q22. 「スローオフ実施中のスローを行うチームのプレーヤーの位置」について、スローオフエリアの中に複数の味方プレーヤーが入ることは許されるという認識で良いのか。

- A. スローオフエリアの中であれば、下の写真のように、スローを行うチームの複数名のプレーヤーがスローオフエリアの中に入ること、その状況でスローオフを行うことは可能です。



Q23. スローオフエリア新設による得点後のスローオフとゴール間のエリアへの進入の考え方として、帰陣するプレーヤーはそのエリアに進入し帰陣してもいいか。

- A. このエリアはスローオフを行う攻撃側プレーヤーにとっての「聖域」となります。

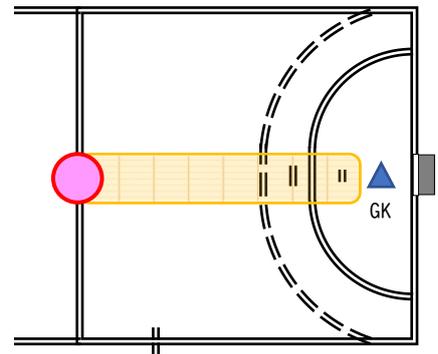
したがって、得点後帰陣する防御側プレーヤーは、相手攻撃側がスローオフを行うことを保障すべきであり、右図の着色部分には安易に入ることがないようにすべきです。

スローオフに影響がない場合と明らかに判断される状況下（例えばクイックスローオフに転じようとしないう等）であれば、防御側プレーヤーがスローオフエリアに侵入しながら帰陣することは可能です。

ただし、

- ・スローオフはこのエリアの中で、必ず実施される
- ・防御側チームとなるプレーヤーは、スローオフが完了するまで、このエリアには侵入できないことを、明確に示している
- ・防護側となるプレーヤーは、スローオフを妨げることはできない

ことから、帰陣の際に、GKからスローオフエリアまでのゾーン（上図、着色部分）を横切って帰陣することのリスクがあることは、ご理解いただければと思います。



Q24. すべての会場、コートでのスローオフエリアがラインだけでなく、エリア内も色塗りされるのかが気になります。

A. 国内では、

・スローオフエリアを設置しない

設置する場合は

・プレーイングエリアとは異なる色で設置（国内では広告、チームマスコット等を想定）

・直径4mの円をラインで描く

上記3つのうちいずれかを、主催者の判断で決定するとしています。

またスローオフエリアを設置する場合、以下の内容も参考にされて設置してください。

1) スローオフエリア内のセンターライン

・すでに線が引かれている場合は、マスキングの必要はない（してもよい）

・線が引かれていない場合は、スローオフエリア内はセンターラインを引かずに対応

2) 床にバスケットのセンターサークル等がすでに引かれている場合

・可能ならばマスキングテープ等でラインを消し、スローオフエリアラインを引く

・マスキングテープ等の準備ができない場合は、センターサークルとは明らかに異なる色のラインで、スローオフエリアラインを引く

※ いずれの場合も、スローオフエリア内センターラインをマスキングする必要はない（してもよい）

Q25. スローオフエリア際の判定が増えて、センターライン付近の状況が確認できなくなる可能性があるのではないかと考えます。スローオフエリア付近のオフENSとディフェNSの状況観察とセンターライン付近のその他のオフENSの状況観察は、コートレフェリーが行いますか。

A. スローオフを行う際に、スローオフエリアやセンターラインを管理するのは、ゴールレフェリーからコートレフェリーとなる（スローを行うチーム側に位置する）レフェリーとなります。

・スローオフエリアに少なくとも片足とボールが入っていることが観察できる位置取り

・スローを行うプレイヤーの味方のプレイヤーが、センターラインから出ていないか

・防御側プレイヤーは、スローオフエリアの外側に位置を取っているか

などを、観察・管理することになります。

ただし、GKの頭部への直撃に関する回答でも書きましたが、コートレフェリーの位置によっては、これらが正しく観察・判定することができないことも考えられるため、**ペアのサポートを受けながら、「両レフェリーで連携・協力しながら正しい判定を下していく」**ことが求められます。

例えば、ゴールフェリーとなったレフェリーから、

- ・相手コートにスローを行うプレイヤーの味方のプレイヤーが残っている
- ・スローオフを行う際に、防御側チームのゴールがGK不在であることを伝える
(競技終了前30秒間を含め、違反があった際の再開方法や罰則の種類が異なってくる)
- ・スローオフエリア付近に防御側プレイヤーが立っている

などを、通信機器を活用してペアに伝えることができます。

コートレフェリーは自身の責任領域の中で、起こりうる違反を観察できる位置取りを求めて動くこと、準備することを原則とした上で、ゴールレフェリーからのサポートを受けながら、両レフェリーで協力し、観察、判断いただければと思います。

4. 「パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数の変更」について

<競技規則 7:11、7:12 / 解釈 4>

Q26. ジャパンオープンや国体では、パッシブプレーの予告合図後のパスの最大回数は6回とのことですが、インターハイも同様と考えて良いか。

A. 運用の有無について、各連盟に一任しております。

本Q&Aの最後に、各連盟からの回答を集約した「<別表> 新競技規則に係る各連盟における運用」を掲載しておりますので、そちらも参考にいただければと思います。

Q27. 予告合図のタイミングが気になる(場合によって攻撃チャンスがほとんど無くなる?)。

A. パスの最大回数が4回に変更となりましたが、レフェリーとして、攻撃側チームに対し、狙いを定めた攻撃態勢に入る前に、その組立て局面においてパスプレーを行うことを、原則として認めることには変わりはありません。

ただし今回の変更によって、チームにとって「パス1回」がより重要となってきますので、以下に挙げた例などに注意をする必要があります。

・予告合図を挙げるタイミング

- プレイヤーがボールを保持している時に挙げることで、チーム、プレイヤー、観客に明確に「1回目」を示すことができる
- 「いいタイミング」として…
ウイングプレイヤーへのパス
ボールを持ったプレイヤーが相手ゴールから遠ざかる など

- ・ 予告合図を**示すべきでない**タイミング
 - ボールが空中にあるとき（特に、味方へのパス）
 - フリースローの判定の後、競技が再開されたとき
 - … パスプレーを伴う組み立て局面を攻撃側チームに認める必要があるため（ゴールレフェリーから、通信機器を活用してフリースロー直後だから、気を付けるよう確認することも可能）
- ・ 通信機器を活用して挙げるタイミングを合わせる
 - チーム、プレーヤー、観客に明確に「1回目」を示すことができる
- ・ 予告合図を示したことの「**発信**」をすることも大切
 - 予告合図を示した後は、コートレフェリーは周囲に聞こえるような大きな声で**パスの回数をカウントする**
 - … 「1、2、…」と声に出すことで、チーム、プレーヤーに明確に「1回目」を示すことができる
- ・ 挙げるまで、挙げてからの攻撃側チームの状況や振る舞いの観察
 - 防御側プレーヤーの評価も含めて判断する

Q28. 小学生や競技経験が少ない選手の試合では予告合図が十分に伝わらないことがあります。カテゴリーや競技レベルに応じて、パッシブプレーの予告合図の伝え方を工夫すべか。

- A.** 今年度（令和4年度）審判員の目標「審判員の心得 10 箇条」にもありますが、カテゴリーが下がれば下がるほど、あるいは初心者に対して、レフェリーには「誠実さ・丁寧さ」が求められます。パッシブプレーだけでなく、それ以外の競技運営に関しても、伝え方、表現の仕方、立つ位置などを工夫されつつ、コート上でリーダーシップを取ってプレーヤーを導いていただければと思います。

Q29. 残り時間（例えば、残り1分を切つて）を考えて、DF側チームにとってもう一度攻撃に移るチャンスを与えるべきか。

- A.** パッシブプレーの予告合図を示すタイミング（Q27も参照のこと）も含めた全ての判定基準において、**60分間、同じ基準で吹笛**されることが求められます。残り時間で新しい基準を作るのではなく、**それまでの基準と変わらず**運用していただければと思います。

< お願いとお知らせ >

新競技規則に関するご質問がある場合、以下の流れとし^{※Ⅰ}、国内においてハンドボールに携わる全ての人々が情報を共有できるよう、個別による質問等への対応は、控えさせていただきます。

1. まずは自身が所属される審判長へ、ご質問をお伝えいただく
2. 1. の内容を、各都道府県協会審判長を通して、日本協会審判本部へ集約
3. 日本協会審判本部より回答^{※Ⅱ}

なお集約された質問に対する回答については、以下の通り、複数回に分けて日本協会ホームページへの掲載を予定しております^{※Ⅲ}。

第一次集約

- ・ 5月初旬までにお寄せいただいた質問
- ・ 第一次回答として、5月末を目処に回答（本Q & A）

第二次集約

- ・ 8月下旬までにお寄せいただいた質問
- ・ 第二次回答として、9月中旬を目処に回答

第三次集約

- ・ 11月中旬までにお寄せいただいた質問
- ・ 第三次回答として、12月末を目処に回答

ご理解とご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

令和4年5月25日

(公財)日本ハンドボール協会 競技・審判本部

競技本部長 高野 修

審判本部長 福島亮一

※Ⅰ：ブロック協会審判長、各都道府県協会審判長、連盟審判長には既に依頼・周知済みです

※Ⅱ：日本協会ホームページへの掲載をもって、ご質問への回答とさせていただきます

※Ⅲ：期日については、状況を考慮して変更する場合があります

< 別表 > 新競技規則に係る各連盟における運用

	GKの頭部へのボールの直撃	新規格球の使用の有無	スローオフエリアの設置	パッシブプレーの予告合図後のパスの最大回数(4回)の変更	備考
小学生委員会	適用		Jクイック方式のため適用しない	全国小学生大会より適用(※1)	※1 予選は、各都道府県の実情に合わせて適用、実施する場合は、参加チームに告知する
中体連・中学生委員会	4月1日より先行して適用	新規格球を大会球として使用	全国中学校大会終了後より適用(※2)	全国中学校大会終了後より適用(※2)	※2 ジュニアオリンピックカップでは適用しない
高体連	適用(※3)	—	全日本高校選手権大会終了後より適用(※4)	全日本高校選手権大会終了後より適用(※4)	※3 都道府県予選より適用 ※4 全国高等学校選抜大会は適用
学連	適用	—	適用(※5)	適用(※5)	※5 東西学生選手権大会より適用
社会人連盟	適用	—	全日本社会人選手権より適用	全日本社会人選手権より適用	
JHL	適用	—	7月開幕より適用	7月開幕より適用	
ジャパンオープン 国民体育大会	適用	—	適用しない(※6)	適用しない(※6)	※6 各ブロック予選大会：適用 各都道府県予選大会 ：可能な限り適用を推奨
日本選手権	適用	—	適用(※6)	適用(※6)	

(参考)

注) 上記大会はすべて、2022(令和4)年度実施予定の大会です